

1st day  
AM

# 第1会場●2F 第4研修室

■司 会／高瀬 薫 鹿児島県いちき串木野市教育委員会社会教育課 課長補佐  
島田 浩一 熊本県生涯学習推進センター 社会教育主事

分科会の進め方

10:45~10:50

## 1 本のある子育て・読書に親しむ地域づくりのお手伝い

10:50~11:20

廣田 須美子(熊本県和水町) 和水お話の会 代表

本会はH22年の発足。公立の図書館も書店もない町の状況に鑑み、学校外の読書環境の充実と読書活動の推進を目標に掲げた。会員数15名支援ボランティア15名。2か所の公民館を拠点に、土曜よみよみ会、朗読と音楽のひと時、心を育てる「読み聞かせ講座」、絵本作家による講演会、子どもの読書フェスティバル、大人のための古典文学講座、専門学校生によるオペレッタなど新しい風と継続性を目指している。活動資金は「会費」と「子どもゆめ基金」の助成で賄い、読書活動の推進を通して、世代間の交流やブックスタートや子育て広場を主催する行政との協働も進んでいる。

## 2 市民の 市民による 市民のためのイベントづくり ～あなたの心に火を灯したい～

11:25~11:55

原田 祐一(鹿児島県鹿児島市) 「サンエールさわやかウェーブまつり」実行委員会 実行委員長

開催場所は市の生涯学習施設であるサンエール鹿児島である。まつりの実行委員は、関心ある市民を募集し、21名で構成。12月のイベントを目標に活動は7月から定期的に14回の会議を積み上げて行く。予算や運営企画は、鹿児島市の生涯学習課と連携の基に行なわれるが、目標テーマは、あくまでも市民による市民のためのイベントの創造である。イベントプログラムは、活動成果のステージ発表、展示、ワークショップなど多様な市民の関心と興味を拾い上げて多彩なものになった。市民参加の実行委員会方式は、熱意と意識を醸成し、自律的な活動を創り出し、活動の中身も活動者の輪も一気に拡大し、参加者数の増大に繋がり、市民相互の交流成果も実感された。

## 3 地域と学校が協働して存続させる無形文化財:子ども人形浄瑠璃

12:00~12:30

原田 浩(山口県周南市) 周南市安田の糸あやつり人形芝居保存会 会員

子どもは恐るべき力を潜在させている。周南市立三丘小学校の5年生は総合学習の時間に安田地区の伝統芸能「糸あやつり人形芝居」を学び、郷土への関心を高め、文化遺産を過去20年に亘って継承して来た。子どもたちは、「人形遣い」、「浄瑠璃語り」、「三味線」の3部門を学び、阿波・淡路まで研修に出かけ、福井子供会と競演し、淡路人形座の指導も受ける。練習成果は、定例的に学校行事、地域の文化行事で披露している。保存会の30代~80代の指導者13名が共同で指導に当たっているが学校の協力があるので途切れずに続いている。

1st day  
AM

# 第2会場 ● 2F 自由研修室

■司 会／眞鍋 幸一 愛媛県 国立大洲青少年交流の家 所長  
堺 康成 福岡県教育庁福岡教育事務所 主任社会教育主事

## 分科会の進め方

10:45~10:50

### 1 防府しあわせマルシェ ～笑顔育て、つながりを創る市民参加型まちづくり～

10:50~11:20

柴田 優爾(山口県防府市) 防府しあわせマルシェ実行委員会 代表  
中司 俊生(山口県防府市) 防府しあわせマルシェ実行委員会 副代表

動機と目標は、防府天満宮参道下の「回遊性」を拡大し、天神商店街まで人の流れを呼び戻し、賑わいと市民間の交流を創り出すことである。マルシェは「市場」、市民から出店者を募集し、農産物飲食加工品、手工芸品、手づくり雑貨などを販売する。マルシェは、天神商店街振興組合と協働し、五日が土日に重なる天神五日市に合わせて自由参加型の市場として位置づけている。場所は、天神商店街の空き店舗前及び駐車場を活用してテントを張る。チラシ、当日の呼び物、福引きくじなどを工夫した結果、新規出店者が増え、同時に来場者も増加し、認知度が上がり、毎月開催の打診を受けるまでに成長している。

### 2 産官学の共創が生む力 ～企業による食育の取組みを地域の未来づくりにつなげる～

11:25~11:55

難波 裕扶子(宮崎県日向市) 南日本ハム株式会社 総務人事部長付マネージャー(食育・広報担当)

当社は、2012年から日向市教育委員会の要請を受けて「企業等による出前授業」事業に参加し、2013年に県教育委員会のアシスト事業に登録。目標を食育による社会課題解決への貢献においている。活動テーマは「食べることは、生きること。」であり、当社の強みを生かした企業見学、出前講座、セミナーなど、食育と環境教育の資格取得者がオリジナルのコンテンツを開発して全世代を対象としたプログラムを提供している。共創の目標は関係者全員がwin-winになることであり、学校との協働では打合せを密にし、実施後はPDCAを欠かさず、プログラムの進化を目指して来た。食は人の未来(身体・心)を創るにもかかわらずないがしろにされがちであり、子どもだけでなく現役世代や高齢者へのアプローチも重要であると考えている。

### 3 人々を繋ぎ、対話を創りだす「公民館カレーの日」

12:00~12:30

松村 早紀子(佐賀県佐賀市) 佐賀市立循誘公民館 主事

「公民館カレーの日」は県と組んだ地域課題解決事業の副産物として生まれた。目的は交流と対話の促進である。平成25年度から毎月決まった日に異なる地域の団体がカレーづくりを担当し、関係者に振る舞うことが原則である。PTAが担当するときは、子どもが作り手になった。男性料理教室が担当したときは、メンバーの配偶者仲間が招かれた。公民館が担当したときは、高齢者、中学生およびその保護者に協力を呼びかけ、多世代間の交流になるように務めた。

28年度は地域福祉をテーマとした公民館講座の受講者が学びの実践として関わった。開催日は毎月10日としているが、時には土日の週末も開催した。開始は11:30。特別なプログラムは作らず、参加者は好きな時間に来館し、座った席で対話を楽しみ、カレーがなくなったら終了する。まちづくり協議会から米・珈琲の現物支援があり、当日の参加費：200円で賄っている。公民館に来たことのない人が来るようになり、カレーづくりから地域活動・地域デビューが始まっている。

1st day  
AM

# 第3会場 ● 4F 視聴覚室

■司 会 / 棕本 博志 長崎県教育庁生涯学習課 参事  
中島 公洋 熊本県教育庁教育総務局社会教育課 社会教育主事

分科会の進め方

10:45~10:50

## 1 自立・貢献・活性化を目指す白山青年団

10:50~11:20

古瀬 彬(長崎県島原市) 島原市白山青年団 団長

現在団員は18名であるが、活動の過程で高齢のOBから声をかけられるなど、青年団活動の伝統は地域に息づいていて、「隠れ応援団員」がいることを実感している。活動目標を自立・貢献・活性化に置き、存在をアピールし、連帯意識を高める工夫の一つとして青年団Tシャツも創った。仲間を募集し、組織の力を発信するため、祭りなどの地域行事、学校や公民館などの事業に積極的に参加している。子どもを対象とした事業では、保護者や参加者の理解を得られるよう事故等には細心の注意を払っている。月1回の定例会で意見を集約し、若者代表として市政の会議などでも意見を述べるようになり、地域活性化の一翼を担っている。

## 2 停滞・制度疲労を活動スタイルの変革で乗り切った 有明佐賀航空少年団17年の軌跡

11:25~11:55

横尾 寛二(佐賀県佐賀市) 有明佐賀航空少年団 団長

時代の変化、団員の興味・関心の変化で、10年を過ぎたころから少年団活動は停滞し、団員も減少し続けて、一時は休団の危機に直面した。幸い、新人団員の父兄・祖父幹部団員に加え、新しい発想で時代の要求に合わせた活動スタイルの見直しを行ない、組織を再生させて継続することに成功した。団の目的は、大空に興味のある青少年が、航空関係の職場・施設の見学・団体活動の基本を学ぶことを通して、航空関係に関わる夢を実現することである。そのため、航空会社・航空保安大学校・各地の航空博物館などを見学・研修する傍ら、団体活動の訓練も行なっている。現在は、幹部団員15名、少年団員25名(内、女子4名)で構成し、活動資金は行政の市民活動助成金、民間の基金などでまかなっている。活動成果は先輩たちがパイロットや航空業界で活躍していることである。今後とも交流事業を密にし、職業体験の出前授業を開拓したい。

## 3 地域を耕し、人を繋ぎ、未来を拓く青年団

12:00~12:30

田山 伊穂里(熊本県球磨村) 球磨村立球磨中学校 養護教諭

3年前に誘われて初めて参加した青年団活動は30名の団員と学校を繋ぎ、更に地域をつなぐ活動に広がって行った。活動は、年間を通した主催行事を通して地域を耕し、人を繋いで行くことであった。清掃活動から始め、棚田の田植えそして稲刈り、小学生を対象とした「球磨村探検隊」、村の駅伝大会、文化祭や体育祭、球磨村ふれあいまつり、最後は村のクリスマスサンタ大作戦と続く。弟妹の世話をする活動を通して「学校」と「青年団」が繋がっていることにも気付いた。住民交流も子どもたちの地域参加も青年たちが創り出し、青少年健全育成と同時に村の活性化の役割も担っている。青年団は未来を拓いているのである。

1st day  
AM

# 第4会場 ● 4F 大研修室

■司 会／樓園 成人 鹿児島県始良市教育委員会 社会教育指導員  
上野 知彦 福岡県教育庁北筑後教育事務所 主任社会教育主事

分科会の進め方

10:45~10:50

## 1 村民みんなで創る「とうほうテレビ」

10:50~11:20

梶原 京子(福岡県東峰村) とうほうテレビ 住民ディレクター

2010年、福岡県東峰村にケーブルテレビが開局した。「とうほうテレビ」は、「東峰にゆーす:20分」と「村民ひろば:40分」を合わせて1時間番組を毎週村民の協力を得て制作し、村のほぼ全世帯で視聴できる東峰村ケーブルテレビである。ケーブルテレビでは、自主番組の企画から編集までをすべて行う「住民ディレクター」をICT人材として育成している。

自主番組は、「村民の生活を楽しく豊かにする番組づくり」を目指し、住民の暮らしに直結した福祉・医療・介護、生涯教育などの行政情報と村の歴史や文化を紹介する地域情報で構成されている。日常の生活を伝え合うこととお互いの暮らしを知り、いざというときの救助、減災、防災にも大いに役立つとして集落等からの番組づくりを積極的にすすめている。特に、合併前の旧宝珠山村と旧小石原村の各集落の交流をはかるため、積極的に地域情報の発信を行っている。とうほうテレビは、村民スタッフの活躍を通して、広く全国、海外を見通した村民の新しい人生を開拓したことが話題となり、NHKで地域ドラマが制作されるまでになった。開局以来まもなく丸6年、ケーブルテレビが村を変え始めた実感がある。

## 2 大山ガガガ学校 ～アートで蘇る旧分校と地域のか～

11:25~11:55

大下 志穂(鳥取県大山町) こっちの大山研究所 代表

大山町長田集落にある廃校となった長田分校の活動拠点に、集落への移住者が中心となり、子どものためのアートの学校を企画。「大山ガガガ学校」と名付け、地元住民の協力のもと、平成27年度に活動を開始。実施は、「鳥取県子ども文化芸術体験支援事業」の助成を受け、オブジェ、踊り、アニメーション、デザイン、音楽、自然体験まで含め、多様な分野で芸術的視点を取り入れた自由度の高い授業を展開している。講師には、全国で活躍しているアーティストを招き、町外からの参加者も多く、地域内外の交流が活発になり、地元自治会も旧分校の保存と活用に動き始めている。アートの力は地域に新しい力を生み出している。

## 3 歴史を学び、景観を守り、まちづくりにつなげる

12:00~12:30

田中 聡(鹿児島県鹿屋市) 鹿屋市教育委員会 高須地区生涯学習センター 館長

高須町および浜田町では、センターと町内会が協力して、郷土の歴史や人物を学び、戦跡や遺跡を辿る「まちあるき発見塾in高須・浜田」(年8回)という市民講座を開設した。また、「永遠の0」の主人公にスポットを当てた戦跡巡り、大隅線開設100周年記念行事、孫に語る「私たちの戦争体験と昭和の時代」などのプログラムを実施した。一連の活動は、「かごしま・人・まち・デザイン賞」の景観づくり部門で奨励賞を受賞。バスツアーも講座の参加者も増加し、来訪者には、高須町内会婦人部の皆さんがおもてなしをするなど、住民活動が活性化し、自信と誇りが生まれている。



# 第1会場●2F 第4研修室

司会／青木 拓夫 島根県雲南市教育委員会社会教育課キャリア教育推進室 派遣社会教育主事  
西嶋 穰 福岡県教育庁筑豊教育事務所 主任社会教育主事

分科会の進め方 13:30~13:35

1 小学校の空き教室を活用した「地域交流スペース」から  
広がるスクール・コミュニティ 13:35~14:05

市川 恵(島根県益田市) 益田市立豊川小学校 社会教育コーディネーター

平成27年度からコミュニティ・スクール方式が採用され、地域と学校の交流空間として、空き教室を活用した「地域交流スペース」が設けられることになった。また28年度には「社会教育コーディネーター」が配置された。この地区には、保育園、中学校、自治会、公民館、民生・児童委員などで構成する子育て支援組織「豊川地区つろうて協議会」や、中高生グループ「とよかわわっしょい!!」が存在していたので、3者は協力してスペースの改装に着手した。改装の中身とやり方は合議で決めて行った。テーブルも椅子も手づくりとし、中高生たちは地元企業の指導を得て壁紙の張り替えを行なった。時間をかけ、たくさんの方が関わりながらこの場をつくってきたことで、「みんなのスペース」となって行った。次の課題は人々の意見を聞きながら活用の中身を紡いで行くことである。

2 ゆめ・ひと・まちづくり「浦添市てだこ市民大学」  
～単位制のまちづくり人材育成と学習成果の地域還元～ 14:10~14:40

石坂 ひとみ(沖縄県浦添市) 浦添市教育委員会生涯学習振興課 課長

市民大学は、平成20年開学。二つの目標の同時達成を目指している。人材育成と学習成果の地域還元である。修学は2か年、単位制で、「卒業研究発表」の場も設定されている。授業料は市内在住者2万円、市内通勤者2万5千円、4学部制(コミュニティビジネス・地域振興学部、健康福祉・スポーツ振興学部、文化振興・教養学部、地域・学校支援学部)で、各学部の定員は15名。修学には「地域参加活動の実践を義務づけたまちづくり施策を組み入れている。本人のやり甲斐・学習成果の向上はもとより、卒業生による地域活動、ボランティア活動の活性化、行政との協働、行政への協力などの成果を生んでいる。

ティータイム 14:40~15:05

3 「先生、菰プレするんですか？」  
～教育プログラムを取り入れた児童クラブ(学童保育)の子育て支援の可能性～ 15:05~15:35

大村 恵子(福岡県飯塚市) 穂波東児童クラブ 副主任

平成27年度から菰田児童クラブは、隣接する菰田小学校と連携した取り組み「菰田プロジェクト」を開始。その中で児童クラブ独自の取り組みとして新たに集団活動(教育プログラム)を取り入れ、菰田プレイズ(菰プレ)と命名、新しい試みにチャレンジしている。菰田プレイズは、体力、耐性の向上をめざし、学校の協力を得て学童保育の生活の中心に、運動と学習につながる遊びを位置づけたものである。女性の社会参画がますます増加し、児童クラブの必然性を考えれば、学校と児童クラブの教育的な連携は、子育て支援の可能性を広げるものである。

4 「校長」から「避難所所長」へ  
～地震被災者支援に社会教育手法で対応する広安西小避難所～ 15:40~16:10

井手 文雄(熊本県益城町) 益城町立広安西小学校 校長

自然災害時、学校は突然「避難所」に変容する。学校名の看板を背負った避難所では校長への期待も大きく責任も重い。その時大切にしたい基本精神は、第1に住民の生活・生命維持(トイレ、食事、寝所)、第2は衛生状態の保持、第3は児童のストレス軽減、第4は職員の負担感軽減である。上記のためには避難者、児童、支援者などをwin-winの関係に繋げなければならない。(状況の正確な把握がカギになる。状況を記録し、安否を確認し、意見や要望を傾聴し、他者の力を借り、連絡や調整を一本化し、マスコミなど世間のみち活用する。)活用可能な資源の活用に挑み続けた。放課後子ども教室を開設して、関係者の居場所と安心と有用感を創り得たのも状況を分析、見聞した結果である。支援のキーワードは「安心感の創造」であり、「対応の公平性に勝ると即自性・決断力」であり、「コーディネート力の発揮」であった。教職員の特性ともいえる「カウンセリング・マインド」は、避難者支援に大きく貢献した。

1st day  
PM

# 第2会場●2F 自由研修室

■司 会／紫園 来未 佐賀県 オフィスしおん 代表  
弓削 暢彦 福岡県教育庁南筑後教育事務所 主任社会教育主事

分科会の進め方

13:30~13:35

## 1 放課後等の学び場に寄与するバンクの企画と運営

13:35~14:05

濱崎 博志(高知県) NPO法人高知県生涯学習支援センター 学び場人材バンク コーディネーター

「バンク」の目標は、「全ての子どもたちに豊かな学び場を！」である。県教育委員会の委託を受け、教育活動推進員、サポーター、支援員、学習アドバイザー、前講座講師等を大学生や一般から募集し、バンクに登録。放課後子ども教室や放課後学習室、放課後児童クラブなどの放課後等の子どもたちの学習や体験活動、遊びを支援している。現在、コーディネーター3名、協力者1名で運営し、人材の発掘、登録、紹介、マッチング、関係者のスキルアップ研修等を各自治体の教育委員会や関係機関との連携・協働で推進している。出前講座は27年度165講座、28年度は2月末現在175講座をコーディネートしている。課題は都部での人材発掘である。

## 2 公民館を拠点とした「健康寿命延伸」プロジェクト

14:10~14:40

原田 脩三(愛媛県新居浜市) 泉川公民館 館長

高齢化は地元財政を直撃する。健康寿命を伸ばすことができなければ、介護保険料は増大の一途を辿る。現に、平成24年度現在で、介護保険料が全国で9番目に高く、健康保険料も愛媛県内でトップという報告が出た。「健康寿命を伸ばし、介護保険料を減らす」ことは必然の地域課題となった。本館は、文科省の「公民館活性化プログラム」に応募し、自治会・老人会を巻き込んで包括的な健康づくりプログラムに取り組んだ。具体的には、エクササイズ・ウォーキング(一日1万歩運動)、学校支援地域本部事業への参加要請、「いきいき年輪塾」の開講、花いっぱいボランティア活動、傾聴ボランティアなどの呼びかけ、居場所づくりのアウトリーチ、自治会館での安否確認の集いを行なった。

成果は着実に現れているが、事業のスピードを上げるための課題は関係機関間の連携やネットワーク化である。「健康寿命延伸」というテーマは、公民館の活動戦略を多角化し、明確化する点で大いに意味があった。

ティータイム

14:40~15:05

## 3 赤碕「男の料理教室」の10年

～腕を磨き、認知症を防止し、家事の一役を担い、人々を繋いだ～

15:05~15:35

西村 仁優(鳥取県琴浦町) 赤碕「男の料理教室」 会長  
永田 瑞穂(鳥取県琴浦町) 赤碕「男の料理教室」 副会長

赤碕は漁港の町である。10年前に8人でスタートした「男の料理教室」は「男子厨房にいるべし」をスローガンとした。若い世代も交え、現在会員数は72名となった。目標は、腕を磨き、認知症を防止し、家事の一役を担い、人々を繋ぐことである。本教室は自主運営・自主企画・自学自習で、プロの講師に依頼せず、そば打ちを含め、年6回の教室は、料理好きの役員が工夫をし、講師として開催している。自らの工夫で相互に学習している。メインは魚料理、予算は持ち寄り、レシピは簡易化して、日々の食卓に貢献することを目指している。教室の成果の披露を兼ね、各種の招待食事を企画して、女性はもとより、町の関係者、知事や県議までを招待して、会員と地域をつなぐ工夫をしている。会員が増えすぎて、調理室が狭すぎるのが頭痛の種である。

## 4 障がい者の就労と地域の活性化を目指し、住民とともに 自助・共助の地域づくりを進める「秀溪園」の取組みについて

15:40~16:10

古城 芙美枝(大分県国東市) 社会福祉法人秀溪園 理事長

障がい者通所施設「秀溪園」は、障がい者の就労と自立を目的とし、近隣の高齢者の農地を借り上げて、米、麦、野菜などの栽培、家屋の掃除、草刈りの請負、弁当の宅配などを行なっている。ところが地域の少子化が同時進行し耕作放棄地も増加して、すでに秀溪園だけでは請け負えない状況になっている。地域には新たな雇用を生み出す力は無く、医療・買い物の利便性も悪い。放置すれば地域は活力を失い、過疎化は免れない。地域の衰退は「秀溪園」の衰退に直結すると考え、地域の自助・共助を進めるため、県の補助を受けた実態調査を実施し、「仲間づくり」・「協議会の立ち上げ」・「農産物出荷の仕組みづくり」にとりかかっている。行政、社協、地域住民および当園の連携・協力によって、障がい者の就労、住民の収入の増加、利便性の向上など自助・共助の取組みが進み始めている。

1st day  
PM

# 第3会場 ● 4F 視聴覚室

■司 会／原賀 壽昭 長崎県 社会教育支援「草社の会」 会計監査  
吉岡 康行 広島県 国立江田島青少年交流の家 次長

分科会の進め方

13:30～13:35

## 1 子縁を核とした地域総ぐるみの活性化事業

13:35～14:05

懸樋 勉(鳥取県鳥取市) 鳥取市立東郷地区公民館 館長

東郷地区は過疎で、少子高齢化も著しく、農業の担い手がなく、耕作放棄地も増えてきている。公民館は保育園を併設し、小学校とタイアップして、地域総ぐるみの活性化事業に取り組んで来た。中核となるのは「子どもの縁」である。公民館では、放課後子ども教室を実施、また小学校のPTAは、「東郷みらい塾」を立ち上げ、公民館、子ども会、老人会、NPO東郷未来応援隊など地域の諸団体が連携して、地域ぐるみで子どもの成長をバックアップしている。活動は若者を巻き込み、地域活性化の気運が高まって来た。公民館、PTAともに、活動成果が評価され、文部科学大臣表彰を受けることができた。

## 2 人を繋ぎ、地域と共に歩む保育所の理念と実践

14:10～14:40

岡本 由姫美(広島県府中市) 社会福祉法人光彩会 和光園保育所 所長

人は誰もが「光彩」を放つという理想を法人名に託しています。和光園保育所は、商業施設内にあり、現在、園児160名、商業施設内に子育て支援センターを併設しています。最大の目標は「地域とともに歩む」ということです。「連携」も「ふれあい」も「相談」も「チャレンジ」も「出前」のサービスも、全て目標を達成するための方法の一つです。地域に頭を下げて保育所を支えて下さいとお願いし、同時に保育所もみな様と一緒に歩みますと宣言しました。地域の力で老朽化していた保育所の内部はみるみる整備されて行きました。一方、保育所からは、部屋を活用していただき、園庭を祭りに開放し、教育用具を貸し出し、地域行事に参加し、高齢者施設の訪問を始めました。連携活動は、共同菜園に発展し、芋煮会・クリスマス会・餅つき大会・4町内合同の防災訓練、企業店舗と連携して「ハロウィン」もできるになりました。地域から声をかけていただき、保護者から子育てが楽になったと言っていたことで地域とともに歩む保育所を実感しています。

ティータイム

14:40～15:05

## 3 子育て支援・学校支援・環境保全を中核とした婦人会活動

15:05～15:35

菅 富美子(長崎県佐々町) 佐々町地域婦人会 婦人会長

平成19年、「長崎っ子を育む行動指針モデル事業」に応募した活動案が採択され、子育てひろば「ふくふくクラブ」を立ち上げ、子育て支援活動を開始した。また平成23年からは、県婦連活性化事業の一環として学校支援活動も開始した。「ふくふくクラブ」では、経験豊かな地域のおばちゃんたちが、子育て中のママたちに寄り添い、広場が安全・安心で居心地の良い場所になるよう努めています。

また学校支援では、主として環境保全活動に力を入れ、家庭科の授業支援に参加して、生ゴミから堆肥を作り、野菜づくりに生かし、最後は給食に活用するという勉強と暮らしを結ぶ循環型の学習支援をしています。活動を通して、学校、子ども、保護者との協働が実現し、合わせて婦人会会員の生き甲斐や新たな学びに繋がっています。

## 4 「えほん侍」が見せる父の背中 ～絵本で繋がる家族と地域～

15:40～16:10

池田 大助(宮崎県日南市) 宮崎「えほん侍」 リーダー

長崎県大村市に在住の頃に、自身もメンバーとして活動していたパパ読みの「えほん侍」が活動のモデル。Uターン・転職で宮崎へ戻り、同じ活動を立ち上げ、メンバー7名で、2市1町の図書館でそれぞれ月1回のお話の会の他、学校・幼稚園でもお話を開催している。「えほん侍」は、父親だけのグループであり、ちゃんまげのかつらを被り、オリジナルのTシャツを着用して読み聞かせを行うなど、見た目でも受けるように工夫している。父親自身が楽しむことを前提とし、自宅読み聞かせの延長として取り組み、選書などにも父親の工夫を出している。活動は完全ボランティアで、「パパ読み」の自己充足と、絵本による子どもたちの心の成長への貢献とともに、絵本と育児で繋がる新しいネットワークを楽しんでいる。もちろん、勤務先のワークライフバランスに対する理解は最終目標である。

1st day  
PM

# 第4会場●4F 大研修室

■司 会／東川 絵葉 岡山県教育庁生涯学習課 総括主任  
谷上 元織 島根県益田市教育委員会社会教育課 派遣社会教育主事

分科会の進め方

13:30~13:35

## 1 村育(むらいく) ～地方創生総合戦略の核心～

13:35~14:05

日下 輝彦(徳島県佐那河内村) 村育推進協議会 会長

佐那河内村は県内唯一の村である。村は地方創生総合戦略ビジョンを策定し、その重点を「村育(むらいく)」の振興においた。村育は、行政の縦割りを排し、首長部局と教育行政の予算も共有化し、保育もスポーツも、公民館も学校も、地域おこし協力隊も巻き込んだ総合的な推進組織を作った。目的は、組織を繋ぎ、人を繋ぎ、村の活動を繋ぎ、学校と社会教育を連携させて、グローバルな視点を持ち、ローカルで活躍する未来人材を育成することである。具体的には、放課後子ども教室におけるオール・イングリッシュプログラム、鳴門教育大学の学生サークルの協力を得たさなごうち土曜塾、鳴門教育大学の協力を得たふれあいアクティビティ、川の学習などを展開している。

## 2 地域おこしは人おこし ～地域おこし協力隊がもたらす地域変容～

14:10~14:40

藤井 裕也(岡山県美作市) NPO法人山村エンタープライズ 代表理事

2017年、総務省が行う地域おこし協力隊として活動する若者は全国で約4,000名にのぼる。NPO法人山村エンタープライズは、地域おこし協力隊制度ができて間もない頃に地域住民の協力を得て、協力隊卒業生と移住者でつくられた組織である。主に空き家を活用したシェアハウスを運営し、地域外から若者を受け入れ、人材不足にある地域の事業所とつなぐ「人おこしプロジェクト」や地域の高校生と地域の未来について考える「みまさか学」を様々な主体と協働して企画実施している。岡山県美作市で取り組んでいる実践事例から、地域おこし協力隊の実践活動がもたらす地域変容について発表する。

ティータイム

14:40~15:05

## 3 未来へ繋ぐまちづくり ～元気・やさしさ・幸せの創造～

15:05~15:35

山崎 順子(島根県出雲市) 鳶巣コミュニティセンター チーフマネージャー

山崎 明子(島根県出雲市) 鳶巣コミュニティセンター マネージャー

鳶巣地区では、平成25年を起点とするコミュニティ創造の10カ年計画を実施中である。本企画は、地域を担って来た世代が高齢化し、次の世代へのバトンタッチと人材育成がテーマである。地元拠出金や行政の助成金を活用し、夏・秋の鳶巣祭り、コミセンカフェづくりなどの企画を30代～50代の世代の発想と活動に任せてみた。この世代は現役の実働世代である。この世代が本気で動くことコミュニティの意識が醸成され、高齢世代はもとより、子どもも動き、全世代を巻き込んだ活動に裾野が広がっていく。目標は、住民自らが創り出す近未来の元気・やさしさ・幸せである。

## 4 想いを繋いで35年 ～子どもと青年が共に育つ場を繋いできた「ウハウハ長尾」の軌跡と想い～

15:40~16:10

角田 愛美(福岡県福岡市) 非営利団体 ウハウハ長尾 代表

ウハウハ長尾は、高校生・大学生・社会人で構成された「誰もがいきいきと暮らせるまちづくり」をめざして活動する民間の青年団体である。1982年の結成以来、これまで70回余りのさまざまな野外体験活動を行ってきた。福岡市城南区長尾を拠点に、若者が中心となって企画したアドベンチャーキャンプを行うなど、自主企画・自主運営で、「子どもたち」をキーワードに活動している。企画・運営を行うスタッフは過去のアドベンチャーキャンプに参加していた青年も多く、ここで育った子どもが青年となり、次の世代の子どもへと、更に次の世代の子どもへと想いを繋いでいる。結成当初より自然の中での体験活動を通して、子どもと青年が共に成長する場として活動を続けている。



# 第36回大会 特別報告

■時間 / 16:30 ~ 17:00 ■会場 / 2F 講堂

1st day  
5.20 Sat.

## テーマ ● 不登校・ひきこもりの根本問題 —分析と対処法が間違っていないか?—

報告者 三浦清一郎

# 第36回大会 特別企画 「未来の日本人を鍛える」

■時間 / 9:00 ~ 11:30 ■会場 / 2F 講堂

2nd day  
5.21 Sun.

第1部 : 9:00 ~ 10:10

### <特別講演>

## ヨコミネ式保育の理念と方法、子どもの可能性を引き出す

—成果・普及・未来展望—ヨコミネ式保育は何を目指し、何を成し遂げたのか

社会福祉法人純真福祉会 理事長 横峯 吉文

### <インタビュー・ダイアログ>

登壇者：社会福祉法人純真福祉会 理事長  
聞き手：生涯学習通信「風の便り」編集長  
九州女子大学教授

横峯 吉文  
三浦清一郎  
大島 まな

### <登壇者プロフィール>



●横峯 吉文 鹿児島県 社会福祉法人純真福祉会 理事長

ヨコミネ式保育の創始者。三つの保育園と保育園を活用した学童保育を運営している。教育指導は、一般の保育士が当たっているが、その教育成果は、見学者を驚嘆させるほど、通常の保育園児・幼稚園児・小学生とは発達上のあらゆる点で異なっている。子どもたちには、自学自習の精神が貫徹し、体力、学力、音感、集団への適応力は群を抜き、ヨコミネ式の教育力は小学校卒業までに彼らが達成する実績が証明している。近年、ヨコミネ式の成果をメディアが注目し、全国に認められ、「全ての子どもは天才である」の信念を掲げ、講演活動で全国を駆け回っている。著書に「ヨコミネ式天才児をつくる勉強のスイッチ(日本文芸社)」、「ヨコミネ式天才づくりの教科書(講談社)」などがある。

### <聞き手>



●三浦清一郎 生涯学習通信「風の便り」編集長

文部省、福岡教育大学、シラキューズ大学、九州女子大学などを歴任。退職後、月刊生涯学習通信「風の便り」編集・発行中。昨年は、「隠居文化と戦え」、「戦う終活—短歌で啖呵」、「子育てで孫育ての忘れ物」を出版。メルマガ予約は:krsmiura@rj8.so-net.ne.jp



●大島 まな 九州女子大学 人間科学部 教授

九州大学教育学部社会教育学講座、九州女子短期大学を経て現職。また、中教審教育振興基本計画特別部会委員、福岡県社会教育委員、同男女共同参画審議会委員等多くの社会的活動に参画。「社会教育の核心」(2010年)、「明日の学童保育」(2013年)などを執筆。

第2部：10：20～11：30

## 〈特別講演〉

なぜ「尾道100キロ」か —「若い力を若い力が育てる」プロセス—

次世代育成思想・企画・運営・成果を検証する

NPOおのみち寺子屋 理事長 柿本 和彦

## 〈インタビュー・ダイアログ〉

登壇者：NPO おのみち寺子屋 理事長

柿本 和彦

聞き手：交流会代表世話人 九州共立大学名誉教授

古市 勝也

青少年教育施設サンビレッジ茜 理事長

森本 精造

### 〈登壇者プロフィール〉



●柿本 和彦 広島県 特定非営利活動法人おのみち寺子屋理事長 尾道市議会議員

2003年、「おのみち100km徒歩の旅」を創設。この事業は、小学校4年～6年の子どもたちを対象に自分達の郷土である尾道市内100kmのコースを4泊5日で歩き抜く。子どもたちのサポートは、氏が指導する学生リーダーが当たる。指導者が若者を鍛え、鍛えられた若者が少年を鍛えるという循環が機能している。仲間と共に100キロを歩き抜く中で、自身の内面を見つめ、人との関わりを学び、忍耐力、協調性、積極性、優しさを備えた未来の日本人を鍛えている。サポート役の学生の多くが本大会にも参加しているので声をかけていただけると幸いである。

### 〈聞き手〉



●古市 勝也 福岡県 九州共立大学名誉教授 中国・四国・九州地区生涯教育実践研究交流会代表世話人

九州共立大学スポーツ学部教授、九州共立大学生涯学習研究センター所長、九州共立大学地域連携室長を経て、(現)九州共立大学名誉教授、放送大学・福岡教育大学非常勤講師。現在、「西日本『生涯学習御学友』ネットワーク」世話人代表として、各地で生涯学習・まちづくりについて講演、シンポジウム、司会などでも活動中。



●森本 精造 福岡県 (一財)サンビレッジ茜 理事長

元福岡県社会教育課長、元福岡県立社会教育総合センター所長、元飯塚市教育長。小学校に導入した「子どもマナビ塾」、「熟年者マナビ塾」など多くの先駆的行政施策を実施。辞任後はNPOを立ち上げ、28年3月まで高齢者と子どもたちの交流事業に着手。現在はサンビレッジ茜の理事長として宿泊型学童保育「タフ塾」など展開中。